

NEWS

SEIJI TOGO MEMORIAL
SOMPO JAPAN MUSEUM OF ART



1

I TESORI DELLA CITTA DI PRATO — TRE-SETTECENTO

プラート美術の至宝展

—フィレンツェに挑戦した都市の物語—



2

1 — フィリッポ・リッピ及びフラ・ディアマンテ
《聖ユリアヌスを伴う受胎告知》15世紀
©PRATO, MUSEO CIVICO

2 — フィリッポ・リッピ及びフラ・ディアマンテ
《身につけた聖帯を使徒トマスに授ける聖母》1456-66年頃
©PRATO, MUSEO CIVICO

2005年9月10日土 — 10月23日日

第27回損保ジャパン東郷青児美術館大賞受賞記念

いけぐちちかこ

池口史子展 ―静かなる叫び―

2005年11月3日(木・祝)～12月11日(日)



《途中の町》2004年 油彩

損保ジャパン東郷青児美術館大賞は1977年に創設され、「技術的に優れている」「感覚が新鮮である」「独自の世界を持っている」の3点を選考基準として毎年、前年の1年間に優秀な絵画を発表した画家1名に授与されています。来る11月3日より、第27回目の受賞者である池口史子氏の展覧会が開催されます。

池口史子氏は1943年旧満州・大連生まれ、東京芸術大学美術学部油画科(山口薫教室)で学び、同大学院在学中より個展を開催、その後も立軌展、安井賞展、日本秀作美術展、両洋の眼展など、数々の招待展やグループ展、個展で作品を発表しています。1993年には倫雅美術奨励賞を、2002年には両洋の眼展で



受賞作《ワイン色のセーター》2002～03年 油彩

河北倫明賞を受賞しています。

池口氏は主に花をモチーフとした静物画のほか、1980年代後半より手がけた北アメリカの広漠とした大地に広がる光景や寂寥とした異郷の町並みを描いた風景画で、わびしさと明るさが混在する独特の世界を展開させました。近年ではこうした静物画や風景画の他に、受賞作《ワイン色のセーター》に代表される都会的な雰囲気漂う女性像という新たな境地を開拓しています。

本展覧会では東京芸術大学在学中の初期の作品から新作まで、受賞作を含む約70点の作品をご紹介します。

所蔵作品展 東郷青児と広告デザイン展

2005年12月17日(土)～2006年1月14日(土)



戦前、東郷のデザインした東京火災のパンフレット

「少年の頃から、絵と音楽と文学の間に挟まれて、夢のように過して来た」と述べているように、東郷青児は、幼少の頃からジャンルを問わず芸術に関心があったようです。青山学院中学部在籍中に、竹久夢二の雑貨店「港屋」の商品製作に携わり、雑誌に駒絵や草画を投稿するなど、その早熟な才能を

みせています。

東郷は、コントラバス奏者の原田潤の紹介で、山田耕筰が組織した東京フィルハーモニー赤坂研究所の一室をアトリエとして使うようになります。毎日聞こえる音楽に刺激を受け、声楽家を目指して上野の音楽学校を受験し失敗しています。

そして、18歳で個展を開催し、翌年の二科展では初入選、二科賞を受賞するなど華々しく画壇にデビューするも、雑誌への寄稿、化粧品会社の図案や万年筆の広告制作に関わるなど幅広い視野を持ち続けていました。その後の7年間にわたる留学中も、装飾ガラスの図案工となり、ギャラリー・ラファイエット百貨店で装飾美術の仕事をこなすなど、その才能は海外でも遺憾なく発揮されています。

帰国直後は絵画制作だけでは生活ができず、執筆・翻訳や漫画制作などで活路を見出します。1933年から、旧安田火災の前身東京火災が、東郷の作品を購入し、同社のパンフレットやカレンダーで東郷のデザインや絵柄を使用するようになります。

東郷の絵画作品の展示に合わせて、東郷が執筆、翻訳、装丁、挿画した書籍、東郷作品を使用した絵皿、包装紙、風呂敷、扇子、パンフレット、カレンダーなどを展示し、東郷青児の幅広い活動の軌跡をご紹介します。

INFORMATION 2005年9月—2006年4月

2005年9月10日(土)～10月23日(日) プラート美術の至宝展 —フィレンツェに挑戦した都市の物語—

イタリアのトスカーナ地方、フィレンツェの近郊にある都市プラートが所蔵する14世紀から18世紀までの美術作品約60点を展示します。

月曜休館(9月19日、10月10日は開館) 午前10時～午後6時(金曜日は午後8時まで) 入館は閉館の30分前まで

入館料：一般1,000円(800円)/大・高生600円(500円)()内は20名以上の団体料金/シルバー(65歳以上)800円/中小生無料

2005年11月3日(木・祝)～12月11日(日) 第27回損保ジャパン東郷青児美術館大賞受賞記念 池口史子展 —静かなる叫び—

第27回損保ジャパン東郷青児美術館大賞受賞を記念し、鮮やかな花々や広漠とした異国の風景、都会的な女性像など、初期の作品から新作まで約70点を展示する回顧展です。

月曜休館 午前10時～午後6時 入館は5時30分まで

入館料：一般500円(400円)/大・高生300円(200円)()内は20名以上の団体料金/中小生無料

2005年12月17日(土)～2006年1月14日(土) 東郷青児と広告デザイン展

東郷青児が手がけたデザインの原画と、それらに関連のある絵画・素描などを約50点。

あわせて、広報宣伝物、贈答用グッズなど、絵画以外の仕事も紹介します。

月曜休館(1月9日は開館) 年末年始休館(12月26～1月4日) 午前10時～午後6時 入館は5時30分まで

入館料：一般500円(400円)/大・高生300円(200円)()内は20名以上の団体料金/中小生無料

2006年1月20日(金)～3月1日(水) 未来を担う美術家たち「DOMANI・明日」展 2006

文化庁芸術家在外研修(新進芸術家海外留学制度)の成果

文化庁が実施している若手芸術家の海外研修の成果を発表。

本年度は彫刻・立体造形・現代美術の分野で平成9～14年度研修修了者の中から9名の作品を紹介します。

月曜休館 午前10時～午後6時 入館は5時30分まで

入館料：一般500円(400円)/大・高生300円(200円)()内は20名以上の団体料金/中小生無料

2006年3月16日(木)～4月13日(木) 第25回損保ジャパン美術財団選抜奨励展

各美術団体の絵画部門における「損保ジャパン美術財団奨励賞」受賞作と、全国の推薦委員によって推薦された絵画作品を展示。あわせて団体彫刻部門の奨励賞受賞者の新作を紹介します。

月曜休館(3月21日は開館) 午前10時～午後6時 入館は5時30分まで

入館料：一般500円(400円)/大・高生300円(200円)()内は20名以上の団体料金/中小生無料

TOPICS

選ばれた新進作家たち 第24回損保ジャパン美術財団選抜奨励展 入賞作品報告



後藤拓朗《部屋・紫・少女の砂》

損保ジャパン美術財団では第24回選抜奨励展(3月10日～4月14日)に先立ち、2月28日に全出品作(平面62作品)を対象に審査を行いました。審査員は池口史子、佐野ぬい、瀧梯三、田中通孝、真室佳武、ワシオ・トシヒコの各氏に財団関係者2名を加えた計8名。入賞作品は下記のとおり。

損保ジャパン美術賞

後藤拓朗《部屋・紫・少女の砂》油彩・キャンバス

秀作賞

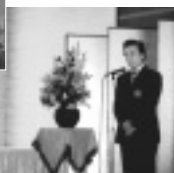
矢澤健太郎《ある日の午後》油彩・キャンバス

久保輝秋《坂道—05》ミクストメディア・キャンバス

遠山香苗《15 / 02 / 04》アクリル・オイル・コンテ・キャンバス



受賞作《天と地と》



第28回損保ジャパン東郷青児美術館大賞授賞式開催 受賞作は大津英敏氏の《天と地と》

6月14日(火) 損保ジャパン本社ビルにおいて第28回損保ジャパン東郷青児美術館大賞を受賞した大津英敏(えいびん)氏の授賞式が開催され、選考委員をはじめ多くの方々が出席されました。大津英敏氏は1943年熊本県生まれ。東京芸術大学で学び、早くから独立展をはじめグループ展や個展で作品を発表、現在は多摩美術大学教授として活躍されています。大津氏は長年家族をテーマとした作品を手がけていますが、受賞作《天と地と》(第26回十果会会展出品作品)ではバリの景観を背景にして、天空に長女・香織さんをモデルにした女性の姿が描かれています。受賞記念展「大津英敏展(仮称)」は2006年秋に当美術館にて開催されます。

シンポジウムを開催します

プラートの関係者がスライドを交え、プラートの歴史と芸術について詳しく解説します。

9月10日(土) 13:00～16:00(12:30開場)

主催：損保ジャパン東郷青児美術館

イタリア文化会館

東京大学小佐野重利研究室

講師：金原由紀子(成城大学講師)

マリア・ピア・マンニニ(プラート市立美術館学芸部長)

クリスティーナ・ニューニ

(フィレンツェ・ピストイア・プラート美術監督局文化技官)

会場：損保ジャパン本社ビル2階

無料、定員200名

参加希望者はHPまたは往復ハガキで「郵便番号、住所、氏名(ふりがな)、電話番号、年齢、職業」を記入のうえ、8月25日必着で下記「プラート展シンポジウム係」宛にお申し込みください。抽選のうえ当選者のみ9月5日までに聴講券をお送りします。

申し込み先：

〒160-8338 新宿区西新宿1-26-1

損保ジャパン本社ビル42階

損保ジャパン東郷青児美術館

プラート展シンポジウム係

ホームページ：

<http://www.sompo-japan.co.jp/museum/>



フィリッポ・リッピ 初来日の祭壇画

フィリッポ・リッピ(1406年頃-1469年)は初期ルネサンスの重要な画家です。フィレンツェから15km程離れたプラートにある大聖堂壁画は、46歳から12年かけた成熟期の大作。その優雅な輪郭線は、弟子であったボッティチェッリに受けつがれました。ミケランジェロも、リッピの澆刺とした人物描写にひかれて模写をしました。プラートには壁画の他に十数点にのぼる作品があり、その中から状態の良い3点(予定)が初来日。壁画の写真や映像もあわせて、盛期ルネサンスに多大な影響を与えた画家をご紹介します。

「聖帯伝説」の都市

プラートは「聖母マリアの帯」がある街としても知られています。伝説によれば、帯は聖母が死後、天に引き上げられる際に残したものの。それを受けついだ家の娘と結婚したプラ

ートの商人が、12世紀頃、プラートの聖堂に寄進したといわれています。14世紀から興隆したプラートの美術は、まずこの「聖帯」を中心とした独特の象徴世界として形成されました。リッピの諸作もその一部です。

I TESORI DELLA CITTA DI PRATO - TRE-SETTECENTO

プラート美術の至宝展

—フィレンツェに挑戦した都市の物語—

2005年9月10日(土) - 10月23日(日)

政治・信仰・美術のダイナミズム

14世紀のプラートで聖帯に関する美術の発注が盛んになるのは、この時期、政治・宗教の両面で急速に危機感が高まったからです。絶大な力をもつ北方の王や君主たちの圧力

を感じたイタリアの共和制諸都市は、それぞれに聖人や聖遺物を象徴としてかかげました。プラートは南東のフィレンツェの脅威にさらされ、市内の聖堂は北西のピストイア教区からの独立を悲願としていました。市民の誇りと愛郷心をかきたてるために、政府は聖帯によって“聖母の特別な加護”をアピールしたのです。

その一環として、当時の人気画家リッピがフィレンツェから招聘されました。注文に応じて各地をわたり歩く芸術家は、地域間の葛藤を超越した職業のひとつでした。有名画家の滞在によって、その土地には彼のスタイルを身につけた工房が残ります。以後のプラート美術にもリッピの足跡が見てとれます。

政治・信仰・美術が、分かちがたく絡みあうダイナミズム。この時代の醍醐味ともいえるその全体像を紹介できるのは、小さな都市ならではの。戦乱の世を生きた都市の歴史を縦糸に、宗教画の展開を読みとく展覧会です。

ギャラリートーク

学芸員が会場内で説明をします(30分)

【一般対象】

9月21日(水)・10月5日(水) 14:00 ~
9月30日(金)・10月14日(金) 18:30 ~

【小中学生と父母対象】

9月17日(土)・24日(土) いずれも 13:30 ~

- 1 — ベルナルド・ダッディ
《聖帯伝説》(部分) 1337-38年
©PRATO, MUSEO CIVICO
- 2 — バッティステッロ・カラッチョーロ
《キリストとマグダラの聖女マリア》 1618-20年頃
©PRATO, MUSEO CIVICO
- 3 — ルドヴィコ・ブーティ
《身につけた聖帯を使徒トマスに授ける聖母》 16世紀末
©PRATO, MUSEO CIVICO

